じいちゃんガンバリヤだがら、津軽のふとだもの。ガンバリヤだばツガルシュだっての。此の辺の人んどさ。オメだのおじちゃへばツガルシュだものって。はだらぐんだ。サゲものまねえ、タバゴものまねえ。ただただはだらいだの。そして、だも此の辺になにふとつねしても、ウヂのおじちゃ、300万出して、みな借金だよ。トラクター買ったの。たっきゃみなしてワアーって。たがいもんだもの。300万もってばドギョウ（度胸）のいい人でねば買ぇれねえ。家族あってでしょ。家族あって、だがらワシはおじちゃのジェンコ見ねで暮らしたの。今でも言ってる。オメのおじちゃドギョいい。むがしの人っていいもんだの（感嘆詞）。何もけなくてもはだらいではだらいで。」

採取の用具・方法　表土はサンボンカで除去し、更にスコプ（スコップ）でサルケの層の表面がきれいに現れるように土を取り除いた。そこにタヂをかけ、モッタでサルケを掘り起こした。一列目の採掘が終わると二列目の表土を除去する作業に入るが、その表土はスコプで一列目に落とした。スコプで土を落とすのはＥ氏がおこない、Ｅ氏の夫は表土が除去されたサルケの表面にタヂで切り込みを入れた。モッタで掘り起こす前に、タヂで縦横に切り込みを入れないと、形が崩れてしまい、きれいにサルケを採掘することができなかったという。タヂで切り込みを入れる作業をＥ氏がおこなったこともあったが、男性でないとまっすぐきれいに切ることができず、「心持ちが曲がっているからだ」と叱られた。

「（表土は）サンボンカで採るの。サンボンカでツヂ取って、そして、ツヂの間にサルケでしょ。だがら、スコプではだげで（土をきれいに取り去って）、きれいに落どして。それがら、今度あタヂかげるわげ。そて割れば、モッタで掘るの。モッタで掘って、ふとっつづづ、上げるの。ふつければ採るにめんどくさいがら、最初からこう、寄せで。そして、採るよにしたの。ながながめんどくせんだよ。ほでもまだ。」「きれいに採ってさ。ドットットットど採るんだ。一通り採れば、まだ、サルケの（上に）ツヂ、低いどごさ落どすわげさ。まだスコプで採って、同じごどだんだけども、そいふにしてばり採って。へばラグでしょ。一回とれば。ひぐいどごさドンド落どして。」「一生懸命の、ひぐいとごさ今度あツヂおどして。スコップでそのツヂコそさ落どして、へばおじちゃタヂずっとかげで。わんど曲がるんだよの。こごろもぢまっすぐでねって、むたどおごられでおごられで。へばおどごんどだば、スパッとやるもの。てづで（手伝い）するべどもってやるの。ダメ。ワいんどのあ、曲がってだめだの。スパッといげねもの。まっすぐこう、いげばいったって。おどごんどあ、スパッとやるね。」

採取の量　採取の目的が田地の改良にあったため、燃料として１シーズンに必要な量、また保管できる量をはるかに超えるサルケが採取されることもあった。Ｅ氏の場合、田１枚（１反歩）から３年分のサルケを採取することができたという。ある年のこと、土地改良を急ぐあまり田２枚分のサルケを採ってしまったことがあった。しかし雨天続きで、せっかく採取したサルケが泥のように崩れ使い物にならなくなってしまった。そのまま田に置くと耕作に支障を来すという理由から、道路に捨てたという。廃棄するのは本意ではなかった。同様のことは近隣住民も経験したようで、捨てる場所のない人は田に盛り上げたままの状態にしていた。こういった失敗もあって、Ｅ家では、普段は田一枚を４区画に分けて計画的に採取するようにした[27]という。

「（掘ったあとのことも）これもまんだ、難しい問題だの。採るのいいけども、採るのハガいぐの。さあ、はごぶに大変。いッっぱいサルケ出るんだ。１枚（１反歩）掘れば。何もかにも、３年も燃やす（だけ）採れるの。１年燃やすんたば何反歩もいらねたての。（田を低くするために）えのおじちゃ、２反歩もとってまたの。さあ、投げるのにみんなば使ねばね、どもなねの。ナンボ欲しふてもの、２反歩だばコヤさ入れでおがれね。そのために、投げるの投げで……捨てるんだよ。ドロ（道路）さ。どごの人も。ドロねふと投げれねで、田んぼさ盛り上げでおぐの。大変でしょ。田んぼさ盛り上げれば。植ぇでいがれねもの。だしてそご円ぐのごしておいで、ガワリさ植えるけども。しかだねもの。投げらいねして。」「余って。おでんき悪ふて。乾がねの。みんな欲しいのさ。どごの人もタキギがないがら欲しいんだけども、ほら、乾がねば燃えねの。それで泥ど同じになって、ペタカタペタカタだの。そのために、乾がすわげ。道路さ置ぐのは、どごさも投げドゴなくて。田んぼのナガさ投げば、邪魔になるでしょ。へば道路だば誰がかれがあるげば、一人でも歩げばぬかるして、へば低ぐなってくる。だんだんだんだん。」「（ある程度の乾燥には）まあ、10日も15日もかがったばって、雨ばり降って降って乾がねどぎある。そうすればこんだ、どごさもこのサルケやるどごねでの。隣でも掘ったがら、隣の父さんも津軽出身で、なもわがらねわげだ。えのおじいちゃんもわがらね。それでも、道路さこんだあげだの。そって、歩げばペタンとなってこたにたがふても、こんきなるの。こうたがふてもペタンとなるの。ナマのうぢに歩ぐでしょ。へば、こうぬがるんですよ。へばサルケだものぬがれば、ちいさぐなるでしょ。こたにたがくもたの、こうなってまっての。道路ど同じになった。」

道路への廃棄は夫婦ふたりが協力し、テモッコで運搬した。その作業は、Ｅ氏が嫁いだ19歳ころから、昭和23年生まれの子どもが小学校に入学する前ころにはおこなわれていた（昭和18年頃～25年頃）。「（田に置いたままにしておくと）田植えるづぎ邪魔になるでしょ。さあ、こんだそれモッタナギして。道路さなげねばなんねの。（男の人と一緒に）２人でやねばたなたいねもの。こしゃなげえ棒つけで、ほして、たなぐんだもの。草のナエだがら、こして乾がへば乾ぐけども、おでんきわりば、しけしてしまって、重くて重くて。女だばふたつもたなげばはあ、動げね。」

道路に廃棄したものの再利用はできなかった。「(捨てたものを使うことは) でぎないの。みんなポロポロになって。こまーぐなってまるの。ポロポロポロポロって。」

乾燥・運搬・保管　サルケを１尺ほどの大きさに採取したのち、三分割した。分割にはタヂを使った。分割の理由は、乾燥を容易にするためである。サルケのブロックを互いにより掛けるような形にして乾燥させた。「(採掘後のサルケの塊を) 今度あそれ大っきの割るんだよ。タヂで。」「水すぐ付でしまるの。だして乾げばすぐウチさ入れねば。屋根のかがったどござ。こんだば (このあたりだば)、コヤ、コヤっての。コヤさかぐしておがねば。」「こったにおっきぐ採るして。３つに割ったがら、１尺から、まだ深ぐ掘らさってらの。そして３つに割って、乾かすの。こう、三角に立てで乾かして。」「こせば、こごがら風はるでしょ。だして乾ぐわげ。ながながめんどくせえよ。」「あだにおっきいのだば、割 (わ) ねば乾がねもの。木でもおんなじ。それと同じで、サルケも割る。」「みんな人の手。はごぶのも人の手。割るのも人の手。掘るのもみんな、自分で掘なければさあ、それも、燃やすごどでぎね。」

現在の金曲地区

用途　「冬でもいづでも燃やすわげ」とＥ氏が語るように、サルケは採暖のみならず炊事の燃料としても使用され、一年中用いられた。炊飯には木をも併用したがなるべく使用量を抑えた (サルケの1/2以下)。その木は、母親が山から採集してきた枯れ枝であった。「うん。木入れるがら。木入れねばやっぱりグヅグヅしてだめだ。ゴゴど燃えるもんでねして。(炊飯の時は) 多ぐ使るわげ。半分半分だば使ねばねの。サルケばりだばやっぱりダメだの。煮だってしまえば、木あまり燃やしねで、サルケのいぎおいで、燃やすけども。」「イロリさでも、えの母親んど、たまに木なぐなれば、木だば採るフトだの。エの母親。いっぱい採ってニンジュウにしてマンナガさシン入れる入れるって、積んだもんだもの。まんだ、はだらぐもはだらぐ。まず30分ぐれ、40分もかがれば、山あったもんだ。それがら、枝コとってきて。枯れ枝。」

夫と暮らし始めた頃はろくな炊事道具もなかったが、母親からナベを２つもらい、食器や箸をそろえた。イロリでナベを用いて炊事をおこなったが、のちにストーブにツバガマを載せておこなうようになった。「そうだなあ、ずっと遅ぐまでナベ使ってらいの。何歳の時だべの。(昭和) 19年はまだまだナベ使ってらいの。ワシらのとぎだばずっと遅ぐに買ったんだい。カネねがら。ほての、ナベもながったの。ナベ町さ買に行ってもながった。なんにも買らいねの。ほて、茶碗ふとつ買ればフログつで、いっぱいつでくんの。子どもんど使るんたフログばり。ウヂのおじちゃ買るの好ぎだして、自転車ではけで行ぐんだよ。今みてに車あるわげでもね。自転車あればは、あどなんもない。茶碗も買らいね、丼も欲しい、茶碗も欲しい、皿も欲しい。ナンも買らいねの。へたきゃえの母親、ご飯ナベど、オツユナベ、２枚くれで。そして、さあ、こんだ皿だってばの。箸もねもんだもの。してこんだ、エのいぢばんのおっきい姉さんの旦那、ヤマゴだの。おとさん、あの、箸つぐってくらいねがったっきゃ、いいいい。箸つぐってくら。箸でいいのがぁ？って。いや、いいよぅって。２人分つぐってきて。ヒノギの、木で。削っての。ジョンズにつぐって来た。」「(その後は) ストーブで炊いだもんだ。ストーブにツバガマで。それ何年の年だが、ワシらちょっと、わがらなぐなった、ほれ。かなり遅ぐなって食べだ (時代が遅くなってから)。ナベかに (買いに)、買えないんだもの。お金なくて。」

サルケの火を風呂焚きに使ったことはなかっという。「フロは最近みな作ったけども、ワシらずっとおそぐまでフロさはたごとね。マヂのフロさ子どもんどぁみんな連れで行っての。」

火の操作　サルケは、直接着火するのではなく、木を燃やしてから割り入れた。乾燥する際に採掘時の1/3にカットされたサルケは、燃やす際には更に手で割って炉やストーブにくべられた。手で割ることは容易であった。「ワシだぢはストグ (ストーブ) さ、丸いストーブさ火燃してがら、それ割って、は、入れるわげ。」「小さくして、入れるわけ。手で割って。なもなんぼでも割れるんだもの。」「必ず火燃してがらでねばだめだの。サルケもまだ。サルケさつけだたて、ブスブスブスブス、ダメダの。ただ木燃やへば、木のおかげで、ほれ、こう、木もかさがるでしょ。へば、ほれ、燃えるにじょんずに燃えるわげだ。木のおかげでポッポッポッポッど燃えるの。」

サルケの質によりもたらされる火には違いがあった。「やわいの」は着火が容易であった。「かだいの」は火力があった。火の操作には経験を要したという。「やわいほうすぐど火付ぐ。ポサポサって草の根がいっぱいあるがら。うん。いっぱいあるんだもの草の根ばりほれ。火燃えでまれば、かだいほうが、なんぼが、モノ煮だるのは、やっぱり、やわいの煮だるに遅いし、かだいの火リョグあるでしょ。シ (火) はねったって。そのために、かだいほうがい

いわげだ。ながながこのサルケもむんずがしいもんだよ。自分で燃やすにかがらないばわがらない。だいでも。」

また、前項に記したように、炊飯に際しては小枝を併用することで火を操作した。

煙・臭気・灰　サルケを焚く際に発生する独特のニオイは、外部の人間にとって嗅ぎ馴れないもの（異臭）であったという。「だしてこのブラグさはれば、薬屋さん。富山でしょ。やあ、ニオイ強い。何燃やしてるのがなどもったど。最初。たらほれ、サルケどいうもの、ニオイするんだよ。草の根だもの。」

また、サルケを燃やしたあとには灰（アグ、ホゴリ）が大量に出た。既製品の薪ストーブを使用するようになってからは、その灰を定期的に除去することが必要だった。掃除機のない時代、ホコリがあがって家の中が汚れ、大変だったという。灰は、発火の可能性があることから、畑に捨てて水をかけて処分した。「ストブ付けでがらの。ストブさ燃やしてさ。そて、アグ溜まるんだよ。ハイが。ものすごぐ溜まる。それこんだまだ、バケツさとって。してこんだ、ソドさ持ってってミンズかげで。そって、はだげさ投げでおぐの。捨てるたてハイだしてなも、水かげでおぐして、ダイジョブだの。ただ投だって火つげば困るして。ツヂだば付がねもの。」「そのサルケ燃やすんだば、アグいっぱい溜まるんだ。ストブさ。いっぱい溜まって大変でった。使っても、ホゴリ溜まるがら火燃えなぐなるの。だがらそのホゴリっこ、バケツさとるわげ。は、とるの決まってるんだ。なんぼがこう、火（し）での、焦げでまるんだ。バケツでも何でも。へば、そのとりがだによって、えの母親だばながながとんねぇ。木ばり燃やして。わしらぁ燃したのだば、ちょぺっとっての。バケツさ入れで、ハダゲさ埋めだり、火つげば困るがら。」「（着火後は）さあ、へば、今度あ大変だの。なして大変だってば、ホゴリ。ブーブブどホゴリあがって。火燃えるでしょ。さあ、そのサルケも燃えるがら、さあ、ホゴリだらけ。どごもかもみんなホゴリだらけ。だしてこごさ入れば、いやあ、何ゴミだべって、しらねふとァ、富山がら来る薬やさんが、ニオイは激しいし、ブラグさはったばりでもニオイしてニオイして、こごのブラグどうしてこうニオイするんだ、こう、おじちゃが来での。代々来るフトあるでしょ。代々来るんだよ。おじちゃが来て、息子が来て、孫さも来るどごもある。今のどごわ、２代しかみねたての。うぢの母親どだば年いっているし３代目見でる。でも１代で終わるふともあるし。そごのウヂによって。」「さあ、ホゴリたって、エのながもなも、汚ふて。大変だった。それでもカネねば、汚ねってらぃねんだよ。今のふと掃除機かげる、むがしはホギでしょ。バヅバヅバヅとほごりあがて。大変でった、ワシらの時代は。」

灰には、肥料としての利用価値があったが、大量に出るため、大部分は廃棄したという。灰水を洗濯に使用することはなかった。「田んぼでも、ハダゲでも。いいんだよ。肥料になるの。今だばリン酸みたいだもんだ。だけども、それまで（＝そこまでして、）だも袋さ二つも三つもとるふとねんだ（だから、多くは捨てるんです）。」

煙は煙突から排出されたが、「ホゴリ」は部屋に噴出した。「煙はエントツがら出るけども。ホゴリづのこごさのごって、プップププって出るの。それ出るわげ。それこごさ落ぢで、ただこしてもブーって上がる。大変だもだの。だがらカネある人はそれ燃しねの。」

サルケを焚くのは「ストーブでもいいの。イロリだばまだまだ（もっと）いいったって」、つまりサルケは炉に適した燃料であるとＥ氏は語ったが、上述の内容からその理由は推察される。

販売・流通　余剰生産分を譲渡したり販売したりすることはなかったという。「欲しふとあればなぼでもくれるたて、雨ばり降って、その年の。掘ったづぎ。誰も欲し人ないわげだ。乾げば欲しいんだけども。ナマだがら。」（この話はある特定の年の話であると思われる。）

その他　Ｅ氏は、大曲に住む前、赤川の旧宿舎に２年暮らしたという。サルケについての直接的な言及はないが、サルケを用いたＥ氏の生活や生き方を窺うことのできる語りであると考え、以下に掲載したい。

「よそのうぢ借りでさ。兵隊ど入った、まだ入ねに戦争さ負げだしての。この赤川のほに、何十軒も建ってったんだ。兵隊んどあ置ぐつもりで。だげどもその兵隊どあ、来れねで負げでまったして、仕方ねえ、こんだ民家さ貸したの。なんぼがでもカネとればいいものの。10円でも20円でも。ほて、そご借りでわしらはって、そのづぎもまだナベ使ってったして、こごさ来たのが、２年いで来たがら、21年さこさ来ての、小屋建でて。」

昭和21年に現住所に移り住んだ当初は、小屋住まいの貧しく苦しい生活であったという。「借家がら来たら六丁間だべ。小せどごで、やあ…、狭い、狭いってってだ。自分でも、小さぐ建でばいなあどもって、小さいうぢたでだの。ほたらこんだ、流しもねわげだ。２年も流しネんで、ソドでばり。ナンベ洗（あら）るべ。ナベさあの、ご飯ガダガダって煮だれば、それこんだあらるに、そどばり。この冬だべ。春なればありがでったって、冬あるもんだもの」「お金もない、道具もない。ナン（「ナン」は感情を込めて）もないどごからの。ウヂのおじちゃ、はだらいではだらいで、サゲもタバゴものまねで田二町歩買って、はだげ五反歩買って、このヤシギ三反歩買って、そして、ウヂ建でで。本当に苦労のどん底でったよ。ほって、自分で、あだらしシャツこ着がな、どもっても、着れないの。ナンもないどごがら立づの大変な話だの。ほでも親がらの。ひとっつでも貰ってみさまい。ラグでラグでラグで。ワシたぢひとっつもないでしょ。何ひとつ貰ったものないの。小屋こひとつも建ででもらったわげでもね。」「ナンもないがら、エの母親、オツユナベど、ご飯ナベだばねばわがねべさ、って。何なふても、これふたっつねばねって。」「ずっと１

里もむごにいで、草刈りしてらって。その草も、たんだそごらさ投げるんでなくて、まろって乾燥させで、そして売る草でったの。そしてどんでもかでもカネにしねば、暮らさいねがら。生活でぎないでしょ、カネなければ。ウチもない。便所小屋もない。むがしトイレはソド。全部ソド。そして、子どもどちぃせって、投げで、ワシらハダゲさでも田んぼでも、行ぐわげだ。そしてれば、やあ、あの子どもウヂにいで、えんつこがら落ぢでねべがどもっての。そう思って12時ガンとなねば、うぢのおじちゃそのサルケ掘って、ツヂ一回取ねぇまねわげ。」「雪ふれば、ユギ切りたのむの。へばの、ありがだふてありがだふて、10円でも欲しっきゃの。へばそごさ、かなふても飲まねふても、走っていぐの。エのおじいちゃんまだの、何の性だもんだが、はだらぐんだけども、この雪どカダギ。道路つけるふとでねの。て、こんどワご飯焚ぎながらの。こさ、ナベかげで火燃して、ふとどりずっとこう、雪なげでばの。こちゃ来てまだ火燃やして、ほてまだずっと小屋のほがら、どごがらみんな道路つけで。こどもど学校さやねばねえどごで。たまにそれねば、いい人だの。ワさかがってくるわげでもねし、喧嘩したごどもねし。」(2015年5月6日取材)

⑤　むつ市大曲　Ｆ氏　昭和21年生まれ　女性

居住の経緯　祖先は津軽地方、金木町嘉瀬から移住した。「金曲よりも大曲のほうが、津軽の人が多い。みんな津軽」だという。自身は現地で生まれ育った。

呼称　サルケについての記憶はある。だが、自家用としたことはなかった。「(サルケを見た記憶は) あります。あのね、土地改良区みたいに土埋めたりして。記憶にはあります。」

用途　サルケは使用しなかった。親戚が東通村に住んでおり、持ち山があったので、薪を購入したり、譲ってもらったりした。「ウヂ先にあの、ヌガでったがなあ、ヌガじゃなくてなんつうんだ、粉炭焚いだりさ、石炭焚いだり、最後までなって……。サルケは焚かながった。焚いでるどごもあるがもしれないよ。ウチは焚がなかった。ウヂ親戚がたまたま山持ってだがらさ。安ぐ買ったりさ、貰ったりさ、親戚がたがら、東のほうがらね。」

Ｆ氏の家に炉はなく、薪ストーブが使用された。母親の実家では、炉に薪ストーブを置いていた。「(こちらの家では) イロリはない。ストーブだよ。うぢの母さんの実家に行げば、イロリがあってさ。薪いっぱい切って炭たまれば、それごそ、イロリが何でも焼いて、あの、ストブも置いてさ。おっきいイロリがあってさ。で、カギついてさ。ほっちゃらがすとがさ。」(2015年5月6日取材)

⑥　むつ市大曲　Ｇ氏　昭和25年生まれ　男性

居住の経緯　Ｇ家は代々下北地方に住んでいたが、先々代が大曲へ移住した。

呼称　「サルケ」と称した。

年代・普及　サルケは、昭和35年前後まで使用したと記憶している。その後はストーブで薪を使用するようになった。「ワァやっぱり、小学校の３年が４年のあだりでねえのが。せいぜい。あどその後になればこんだマギストーブになって。」

分布・質　サルケとは、草の根であると認識している。「そもそもあれ草の根なんだ。サルケづのは草の根。」

採取の時期・場所　家の田から採取した。

採取の主体　採取はＧ氏の祖父や年配の者がおこなった。Ｇ氏は乾燥したものの運搬を手伝った。軽いので子どもでも手伝うことができた。「ウヂのおじいちゃんとが、そういう人、採ったやづを自分らが小さいどぎはごんだりして。乾燥したやづだがら、軽いがら。てづだったの。このあだりはみな。」「我々（子ども）は運ぶだげだよ。年配者が大体、寸法はがって切って、それを乾燥させるのこちで。」

採取の方法　切り取る大きさは30～50㎝程度であった。「30㎝がらもっとすがな。50㎝ぐらいの。」

乾燥・運搬・保管　毎年、雪が降る前に、乾燥したものを子どもたちがリヤカーで運搬した。一冬分を小屋に山積みにして保管した。「その乾燥したやづ自分らがリヤカーとかで運んで、うん。そやって歩いたもんだ。それを毎年くりがえすんだ。ユギ降る前だ。」

用途　サルケは、ドラム缶で作った手製のストーブや薪ストーブで焚いた。「それを乾燥させで、むがしはストブ燃やしたの。ストブさ入る程度に。ムガシみんなそやって。」「ストーブで（焚いた)。どごのウヂでも小屋ってものが大きものだがら、うん。サルケ、山に積んで、一冬。燃やすだげちゃんと積んで。普通のマギストーブだよ。買って来たもの。ドラム缶で作った人もいるんだけどもな。」

また、炊飯はストーブにナベをかけておこなった。「ムガシなんてガスだなんてとんでもねえもの。」

煙・臭気・灰　煙と灰が大量に出た。熾のようなニオイがした。「(煙突から排出されたが、煙は) すごいすごい。うん。アクがすごいんだもの。アクって今だば燃えかすな。ニオイはなんてへば…熾ってが何てが、そういうニオイ。」(2015年9月23日取材)

⑦　むつ市大曲　Ｈ氏　昭和22年生まれ　男性

居住の経緯　先祖は津軽地方、五所川原から当地へ入植した。

呼称　上層の土と下層の土を、「シギボ」、「サルケ」と呼び分けた。「サルケのごとはサルケだの。今で言えば上っつらのツヂ（シギボ）、そのツヂ（シギボ）を浮いでくるどごで、自然にサルケがカヤの根っこだの。それツヂ（シギボ）ど浮いで来るどごで、ツヂを剥いで、草の根をとるわげさ。」

年代・普及　昭和27年から20年代末頃まで、サルケを採取し、焚いていた。「うーんとの、オラだぢ今68になるんだけども、小学校の１年前後、５歳がら小学校１年生の間、だいたいその頃あだりの、その頃てば田んぼの下のツヂ起ごすんですよ。シギボ浮いで来るんですよ。」「(使用したのも）だいたい小学校の１年ぐらいまでだの。」

分布・質　上側の土と、その下にある草やカヤの根を、それぞれ「シギボ」、「サルケ」と呼び分けた。

採取の時期・場所　春に、田から採取した。「春だんですよ。春にやって、それを今度乾がすの。」

採取の主体　Ｈ氏は幼かったため、モッタは使わず、スコップで採掘を手伝った。また、田のクロへの運搬も手伝った。「モッタ、平たいやづの。大人はそういうの使うけども、ワだぢ子どもの頃でそいうの使えねがらスコップでこうやったり。」「(掘ったものを）はごぶの。田んぼあれば、田のクロどがそういうどご積むわげさ。積むのもあの、こう、煉瓦式みたいにビタッど重ねネで間、千鳥にこう。」

採取の方法　タヂで四角形に切れ目を入れ、大人はモッタ、子どもはスコップで採取した。「マットぐらい（30㎝～50㎝程度)。厚さはだいたい10㎝。」「早ぐ言えば、あれみたいになってる四角に氷採るみたいな感じで、タヂってこう、四角に切れ目入れで、スコップで取ってさ。スコップで。モッタ、平たいやづの。大人はそういうの使うけども、ワだぢ子どもの頃でそいうの使えねがらスコップでこうやったり。」

乾燥・運搬・保管　田のクロに、５～６段の煉瓦積みにして乾燥させた。降雪前に、田のクロから道路まではモッコで、道路では荷車を使って、家に運んだ。「こういう感じで５段にも６段にも。」「田のクロに積んで、ずーっと。だいたい１年だな。冬になる前に雪降る前に持ってくるの。リヤカーで。モッコはあれは、田んぼではごんだの。リヤカー入られないがら。田のクロがら道路までモッコだけども、そごがらリヤカーで。リヤカーあるんだ。ムガシの荷車どがよ。木製のあの。あったんですよ。まず大八車ってんでねがなあ。今で言えば。木の車輪で。」

用途　ロブヂで使用し、炊飯もおこなった。風呂の燃料としても使用した。薪ストーブに変わったのは、昭和35～36年頃であった。「ロブヂで焚いて、ご飯も炊いた。お風呂もそれに使ったけども。だいたい小学校の１年ぐらいまでだの。」「これ（サルケは）薪に使ったんだいの。燃料に。ウヂで。むがしはほれ、クズ屋根とがそういうのあったがら。ストブもあったけど、昭和35～6年にストーブで。」

煙・臭気・灰　サルケの煙のニオイが染みついた衣服を着て学校へ行くことが、気まずかった。ニオイを指摘されたこともあった。そのニオイは、「火災現場のニオイ」のようなものであった。「子どもの頃の、フグ着て学校行ぐんだけども、ニオイするんですよ。ものすごぐニオイすんだ。なんがニオイするなって。喋られだごどもあったな。どくとぐのニオイすんだ。今の…今でへば、なんが火事のニオイてがそえんたのがはあ、染みこんでしまって。」

その他　大曲の人の中には、田名部の町へサルケを売りに行った人もあるという。小遣い程度の稼ぎになった。「おらだぢその当時は物売らなかったけども、ある一部の人は、まあ、町（田名部）のほうに持ってって、薪（として）売ったっていう話。燃料として。儲かったっていうより、小遣いになったって。(町のほうでもサルケを焚いた人が）いるわけさ。今みたいにこういうぶんでねえがらさ、町でもイナガあるじゃない。」(2015年9月23日取材)

⑧　むつ市大曲　Ｉ氏　昭和29年生まれ　女性

⑨　むつ市大曲　Ｊ氏　昭和11年生まれ　女性

居住の経緯　Ｉ氏は、脇野沢村（むつ市脇野沢）出身で、大曲に嫁いだ。初めて見る「サルケ田」に驚いたという。あまりにぬかるので、製材所から長い板を買って来ては、田に沈めたり、土を入れたりすることを何年もの間繰り返したという。また、クズヤネも大曲に来てはじめて見たという。「それごそ、クズ屋根初めで見るがら、こごへ来て、ビックリしたがらさ。不思議で不思議でなんながった。どうやってやるんだべって（笑)」（Ｉ氏）いっぽう、Ｊ氏は横浜町の出身である。戦後、樺太から引き揚げ、横浜地区に入植したＪ氏は、昭和36年頃に横浜町から大曲に嫁いだ。

呼称　「サルケ」と呼んでいた。

使用年代・普及の程度（個人、地域含めて）　Ｊ氏によれば、昭和30年代末頃も、大曲ではサルケを使用していたという。「27～28（歳）ぐらいが（昭和30年代末ころ)。50（年）も前が。確か今もこごらへんもまだ掘ればあるべたてかもねきゃ（誰も構わないでしょう)。」

分布・質　腹までぬかる田の下にはサルケがあると考えている。「サルケ田」と言っていた。「ふんづがった田はサルケ田ってへべさ。それ、みんな起ごせば確かあるはずだ。なもこごまでも腹までも入るもんな」（Ｊ氏)。

採取の時期と場所　サルケの採取は春に、田でおこなった。田植えの前か後かは記憶がはっきりしない。「ぬがっ

てるどごで（田植え前にはサルケの採取はしない）。でやって、田植えればまだいぐなるきゃ。それやればぬがるのが取れる。いや、ホントの話、春先やったんでねべがあ」（Ｊ氏）

採取法 乾燥・運搬・保管　Ｊ家では、採取することはなく、近所のＫ家からサルケを譲ってもらった。掘り採る様子を見た記憶では、５寸ほど表土を除いてから、タヂを入れ、スコップで掘り起こした。手で持てるくらいの大きさに切って、田のクロで乾燥させた。乾燥したものをリヤカーで運搬し、小屋にストックした。

「上かわ田んぼのずっと植えだどごあるべえ、あれ掘って、ほて出でくるの。５寸ぐらいにさ、掘って、タヂ入れで、して掘って、重ねで干しとぐの。クロさ。して乾いでがらはごぶの。軽いもんだよ。こしたの、何も。まず、はえごた木の腐ったの燃してるみたいだの。燃えでご飯炊ぐにいがったの。」「サギにスコップでやるんだべさ。タヂ入れで。そしてスコップで掘って、あだりまえの何ちゅうんだ、ほんちょまぐらいにこして、こして、それをまだタヂ入れで、そしてほんだ、これくらいにして、たなげばこうだもの。そして田んぼがら上げで、クロさな（乾燥させる）。一人がそっちにいれば、手わだしでこうやってるのわがってるもの。せばこう小さいのでなぐ大きいのでもない、普通のこのくらいだな。今思えば。持つぐらいにして、それ乾げばこう小さぐなってしまうの。切ってやるどぎだば重いたての。軽ぐなってしまうしてさ。」「××家の、××さん（故人）のエで掘って、貰ってきて燃したんだもの。全部が全部掘ったわげではないの。（私の家では）貰ってきた。」「（××さんの家に）行ったもの。田んぼさ行ったもの。そして貰ってきて燃した。」「（乾燥したものは）リヤカーで運んだ。ネゴ車もねがったの（一輪車もなかった。）はづがし話だな（笑）。」

使用法と用途 サルケを燃料として薪ストーブを用いた。Ｊ氏が大曲に嫁いだのは昭和36年ころであったが、当時サルケを燃料として用いている家は少なかったという。煙は煙突から排出した。石炭ストーブ、石油ストーブも使用した。Ｊ氏は新式の暖房器具が出るといち早く入手した。反射式の石油ストーブを集落で最初に購入したときには、人々が見学に訪れたという。「わいの家はイロリつかね。ストーブだった。油のストーブも燃したし、炭（タン）のストーブも燃したし。さまざま。石炭も燃した。油も燃した。さまざま。だいもつかんね、××さんがら借りて。たらみんな見さ来てあったんだ。ハンシャスキ（反射式）もいぢばん最初に買ったべ。みんなこごら辺の人見さ来たったんだよ。わ、そういうの欲しい人だの。あったがくて、燃料があんまり使わねえってへればホントにすきゃバガで（笑）」（Ｊ氏）。

炊飯にも薪ストーブを使用した。炊飯の際にはサルケに薪を加えて使用した。木を使用すると火力の調節が容易になり、失敗のないことや、Ｊ氏の出身地である横浜町ではもっぱら薪を使用していたため、サルケだけでの炊飯には不慣れであったことがその理由であった。混炊（カデメシ）は食べたことがないという。

「（サルケのストーブで炊飯を）しました。サルケのストーブたって普通のストーブだもの。マギストーブだもの。そのナガにサルケを入れで、マギを入れで。」「ほがの人はそれ（サルケ）ばり燃してるったって、ワイがご飯炊げねば、じょんずに炊げねば、子どもどさも、シュドサマさも悪りどごで、木ど一緒に。」「木ついだらボボボボボてあまり熱ぐもなぐ、あれだべさ。わいどツカガワ（近川）の人がらさ……」（Ｊ氏、会話が中断）。「いやややや、重てぐね、軽いんだボゴボゴって。火つけばすぐ。だいが知らねべが」（Ｉ氏）。「（木を併用した理由は）ワァウヂにいで嫁に来るまえは（横浜で）木で焚いだもの。（サルケは）こごしかねんだよ。何軒もねんだ。ホントの話。みなみなやってねもの。困った生活してる人ばりだんだ。本当に。恥ずかし話だたって。」「（サルケは）みんなやんねえよ。わいどみてに困った生活してる人でねばやねもの」（Ｊ氏）。「困った生活たってムガシみな困ってらったべさ。なも困らね人だっきゃねえよ、みなイモくてカボチャくてさあ。そうだったべさあ。どごの人そたにいい生活してらったってさあ」（Ｉ氏）。「（炊飯の道具は）ナベです。こごのウヂだば絶対（飯に）混ぜ物しながった。だって田んぼつぐってるもの。40だば40出せば、あどみんなセロさ入れでおぐんだ。わど一町なんぼつぐってあったんだもの。３回草とっての」（Ｊ氏）。

風呂は、味噌を煮る大きな釜やドラム缶を利用し、燃料には薪を用いた。サルケは用いることはなかった。薪は近川から購入した。木を持っている家は金持ちだと言われていたという。

「ウヂだっきゃ何人も入る五右衛門風呂だよ。あれでマギ焚いで。近所の人が入ったりして」（Ｉ氏）。「なもフロそどで木燃してかごいして入ったの（笑）。なも恥ずがしもなもね。ワイドだっきゃカイタグに入ってるどごで、味噌煮るカマってあるべさ、フタして。あれさ入ったんだよ（笑）。恥ずがし。それがらドラム缶にも入った。（横浜の）開拓に入ってるどごで。（横浜での話だが、）おもに晩になれば、川に走って行って、川さ入ったよ。夏（なづ）にの。そういう生活したんだもの。はだらげば食べるにいいって、こごに来たんだもの」「（風呂の燃料に）サルケは焚がね。マギ。ドラム缶にマギ。（サルケは）貰って来てるどごで（多用はしなかった）」「（燃料の薪は）買って。近川の山がら買ってくるの。」「むがし木ある家あカネモヂだってへらいであったんだもの」（Ｊ氏）。「ワイほだば自分の実家も木山（きやま）持ってらったがら、木山さムガシのソリさ乗って、手づだいさ行ったったよ、ちっちゃいどぎがら」（Ｉ氏）。

火の操作　前項でも述べた通り、Ｊ氏はサルケを用いた炊飯に不慣れであったため、薪を併用することで火力の調節を容易にした。

煙・臭気・灰　集落のなかでサルケを燃やしている家の近くを通るとニオイがした。また、ストーブの上で干した衣服を着て学校へ行くと、サルケのニオイがした。これらの話をＪ氏は洗濯との関連のなかで語った。Ｊ氏は川で洗濯をした。洗濯物は草の上に置いて干した。Ｊ氏より18歳若いＩ氏は、出身地の脇野沢で、田のハセガケ（稲架）に洗濯物を干したという。「そして燃せばさ、みんなストブの上さ着物掛げで学校さ来て、ニオイするんだえな。そしてこご通って歩いてもそごのウヂで燃しているウヂがニオイするもう外さな。」「子どもどのおしめどみんな田んぼさ行げば洗って石鹸かげるわげでもねえな。そしてたんだ草の上さ干しとぐわげ。エのナガさもつだべな。ワイだばな」（Ｊ氏）。「ワイどの時代だば田んぼのハセ掛けに干したのさ。そごがまだほら、何十年が違う」（Ｉ氏）。「でワイどのせばあれだんだもの、12把ずづまるて立てで、ニオに積んでな」（Ｊ氏）

サルケから出る灰は、イモ（馬鈴薯）の栽培に使用された。イモはカンナガケしたり、潰したり、川で腐らせたりして、イモノハナやイモノコナを採った。冬になると、大切な食糧であった。「イモ植えるどぎだり。使った。ジャガイモ。」「あいだべな、ワラ腐らがして。ワイがむご（横浜）、ウヂにいだどぎカンナガケやった。川さ行ってな。」（Ｊ氏）。「こっちに来たらイモの機械持ってる人がいるじゃない。近川で。そごに行ってみんな川内でも脇野沢の人でもみんなさあ、この××さんていうウヂにイモ持って来て、やってらったもんねえ」（Ｉ氏）。「ワイどだばな、こういうあのシイみたいな木さあのイモ上げで、カギヤ（カゲヤ＝木製の槌）みたいので潰して。ほして川でやるどごで、へたらこい石の上さイモちょっとずづ上げで、砕いでやったの。ウヂのほう、恥づがし話だけど樺太のほうがらのヒギアゲシャだの。そして開拓に入って。そしたの。そればり食べたんだよ。冬なれば」（Ｊ氏）。

その他　大曲には、稲荷神社と八大龍王社がまつられている。稲荷神社は、近川稲荷神社から分祀された。その近川稲荷神社は、津軽地方の高山稲荷神社から分祀されたものである。Ｉ氏は脇野沢村から大曲に嫁いだが、ここに暮らす人々の心のふるさとが、入植から３～４世代を経た今も「津軽」にあることを感じている。「何がいえばこのみんなカミサマはさあ、うぢのジッチャどもアガクラのカミサマとか、なんどがって、アガクラって津軽のほうにあるでしょ。きっと。なんがみな津軽の人だから、聞ぐことみな津軽方面のことばかり。ワほんとの下北のほう（脇野沢出身）だがらさあ」（Ｉ氏）。(2015年9月23日取材)

稲荷神社（大曲）

⑩　むつ市大曲　昭和9年生まれ　男性

居住の経緯　Ｋ氏は大湊の商家に生まれ育ち、昭和29年に大曲に移住した。大曲には母親の実家があった。先祖は中津軽郡笹舘からの入植。

呼称　サルケと呼んだ。

年代・普及　昭和29年に当地へ移住する前から、本家のある大曲に来ることが度々あった。その時、サルケが採掘され、炉で使われている様子を見た。それは戦前から、昭和18～19年ころまでであった。「ちょっとなあ。オラどよりもっと前の人だんだよ。サルケそのものは見でるけども。」「まあこの町内ではオレより年いってる人だちはあるけども、ほとんど年寄りで施設さ入ったりして。ウヂはあの、もどは大湊で生れだがら、ウヂの本家がこごだんだけども、本家の家に何があって来たどぎはロバダで焚いでるの見でる。ワダシの家はもど商人だったがら、ミナドマヂの。来て何があったり、法事あったどが、盆どが、冬にちょっとなんがあったどぎ見でる。んだのお、戦前がなあ。小学校３～４年生あだりまでだど思うなあ。」

採取の時期と場所　田から採取したのを見た。

採取の主体　自ら採取したことはない。

採取の目的　田を低くするために採取した。また、燃料の不足を補うためでもあった。津軽から入植した人が多いことも理由のひとつだと考えている。「田んぼつぐって水が思うようにのらないどご下のサルケ採って、そしてやったそれは見てる。」「ちょうどタキギがながった、この辺山がないどごでの。タキギないがら、そういうサルケ、こごやっぱり津軽のほうがら入って来た人が多いがら、そういう先代の人がだがやってきたのは見でる。」

乾燥・運搬・保管　田に積み上げて乾燥させている様子を見た。「サルケそのものはきたぎてタキギには田んぼに積み上げでな。乾燥さへで。それは見でる。実際採ったごどはない。てづだったこどはちょっとないなあ。」

使用法と用途　炉で焚いているのを見た。「（大曲にある）本家の家に何があって来たどぎはロバダで焚いでるの見でる。」「小さいどぎはの、ロバダでもてきて焚いでるのは見だごどある。」

煙・臭気・灰　煙は出るが、草屋根だったのでそれほど気にならなかったという。「煙は立づ。もどは草屋根だがらあまり気にしなかったけども。そのサルケ焚いだのはそれほど長い時期でながったんだいな。」
その他　以前の大曲地区では、稲作と果樹（りんご）栽培が盛んで、道路沿いでは畑作がおこなわれていた。当時から野菜の産地として知られていた。今は、休耕田を徐々に畑に変え、ハウス栽培に力を入れている。

⑪　むつ市大曲　昭和20年生まれ　男性
居住の経緯　Ｌ氏の父方の祖先が、大正から昭和のはじめ頃に北津軽郡鶴田町から移住した。田は他家から購入した。「うん、ワほのチヂオヤな。ワほのチヂオヤが津軽がら来たった。ツルダ（鶴田）。ツルダの、あの、ミズモド（水元）だがって。大正がなあ。大正に来たんでねが。大正に来たんだが、昭和さなてがら来たのが、とにかぐ、大正が昭和の初めのころがなあ。」「田圃はこれ、もど他所のふとやてったの。これはワほのウヂさなんたかたウヂのすぐそばだつごどで、もぢぬしがワほのウヂさうたのよ。」
昔はＬ氏の家の周囲には家屋が少なく、笹の生い茂る場所だった。大きな松の木の根を切り、薪にしたこともあったという。「ちょとしたひたば、知らないがもほとんど。たてむがし、オレのウヂあたけどや、こごずーっとウヂなふたんだもの。むがし。うん、その辺も。ウチないんだもの。ワほの母親ほら、そごのうウヂ、すぐそち側のエ（家）がら出だふとだがら。こごたてや、最初の頃は、笹こ（これくらい、の意。背丈ほどの高さを示しながら）でたんだね。それさ、笹のほがにや、マヅのおっきいのが飛び飛びにこう、あったど。その根を、スコップで掘ってしまって、そうやって、ワほの母親出だエのや、こごから馬借りできて、エさ引っ張って、それを切たぎて燃やしたど、燃したもんだど。馬でほら、上げでもる（貰う）のさね、へばほら、きれいにツヂ取ってしまって、切れやすいどごがら切って、そうやてマギにして。たって、こごはほんとはムガシはや、赤川、ウチナミケ（赤川ノ内並木）ってなってたの。ムガシけっこうあったらしいぞ。ずっと。」
呼称　「サルケ」と称した。
採取の時期と場所　「春でねばたてでぎねもの」、つまり春でなければできないと語る。
採取の目的　現在は田を作らないからサルケを使うことはないという語りからは、サルケの採取が田地の整備に伴うものであったことが窺える。田地の整備としては、田面を下げて水位を下げることと、排水溝を作ることがおこなわれた。客土には、東方の丘から採取したアガツチが用いられたが、Ｌ氏は砂を客土することを理想としていた。しかし、入手できる土地を持っていなかった。
「（サルケは）ワほのウヂでも採ったよ。採って燃やしたことある。今はないんでねがな。今ほとんど田んぼ作ってねがら。むがしほら、ここで、この田圃でも採ったごとあるな。こご俺のウヂの田んぼだがら。けっきょぐほら、草の根が、底がらたがぐなって来るのさ。それでほら、田んぼにある程度水持ってきても、水ほら、入られねがら、ある程度下げねばほら、だめだがら、ツヂを寄せで、こう切って、乾がしたもんだ。」「水抜がねばだめだがら、セギをふがぐ掘るのせ。むがしだっきゃおどなでもこう、くぐる位ふがぐ掘って、そして田んぼつぐったんだ。この辺はみな。ツヂを寄せで、サルケを採って、乾がして、サルケ切れば、ツヂ切ったほうさ寄で、うまぐやっていぐんだ。」「それ（掘り採ったサルケ）をたって、しばらぐ乾がさねやねえねが。たら乾がしたらあど寄せでしまねば、田んぼ作らいねっちゃ。その手間が大変でったのさ。だがら、一回この辺だったら、一回減反すれば、田つぐるったってながなが難がしいのよ。たって、むつ市では、むつ市の我々大曲だけど、大曲町内会で実行組合づのさ入ってるどごが、九十何軒もあのよ。それで田んぼつぐってるどご今、一人もないんだど（強意の終助詞）。けっきょぐ田んぼつぐるってば田まだほら、けっきょぐ、しょご（底）のほうが、根のアレがたがぐなってきてまるがら、ながなが、一回減反すればながなが、つぐるに。」「だって、じぇんじぇん田つぐってねがら、うん。減反ばりだおん。ただほら、ツヂでもそごさ入れ直して、ツヂをアガツヂだらアガツヂをずーっと入れで、自然にならしてまって、あどほら、Ｕ字溝とが入れで、田んぼつぐるんなら、でぎねわげもねけど、それまでやるたて大変だべさ。」「むがしはほら、馬あるウヂは、馬でアガツヂを、自分のやしぎがら、やしぎって、はだげのほうってばあちがわのほう少したがいっきゃ。あちのたがいほうがら、ツヂ持ってきて入れだり。ほとんとアガツチ。ほんとは、シナ（砂）持て来るたて、自分の土地ないもの。」「シナ入れれば、たって、ある程度沈めば、沈んでいがねがら。」
採取の方法と用途　表土を脇に寄せ、タヂでサルケの層に切りこみを入れ、トガで掘り上げた。大きさは30㎝四方、厚さ25㎝程度であった。掘り採ったサルケは、先に表土を切り取った場所に寄せておいた。乾燥すると厚みは20㎝ほどになった。「道具はあの、むがし、ちょっと待ってよ（と言って納屋からタヂを出して）これでほら、これでこう、切るようにアレすっきゃ。」「田んぼつぐるどぎ、クロノふぢをずっとこう、使ったもんだ。」「ほたらあどはトガっていうので、トガでうまぐ、バッとこうやって、ビッとこう上げるのさ。結局ほら、30㎝（四方）ぐらいの巾で、やるがらほら。」「厚さ、25㎝ぐらいでねがなあ。それほら、乾がすば、意外とこう、20㎝ぐらいになんのが。」「ツヂを寄せで、サルケを採って、乾がして、サルケ切れば、ツヂ切ったほうさ寄で、うまぐやっていぐんだ。」